

台北の歴史を歩く 天母の歴史を探る

片倉 佳史

台北は人口260万を数えるアジアでも有数の大都会。その歴史をたどってみよう。今回は日本人も多く住んでいる天母地区の歴史を紹介したい。地名の由来に始まり、この地が歩んできた歴史は台湾の人々を含めても、あまり知られていない。今回はやや深く、その歴史に迫ってみたいと思う。

外国人居住者も多い高級住宅街

台北市の最北端に位置する天母（てんぼ）¹地区は、市内きっての高級住宅地として知られている。市街地からはバスで半時間あまりの距離にあり、深い緑に包まれ、生活環境の良さで知られている。外国人も多く住んでおり、日本人居住者も少なくない。台北の日僑学校（日本人学校）やアメリカンスクールもここにある。

訪れてみると、その家並みに台湾らしさはあまり感じられない。集合住宅は多いものの、そのいずれもが高級マンションである。緑が多いことも特色であり、エリア全体が閑静なたたずまいを見せている。人々の間ではここに住むことが一種のステイタスにもなっている。

しかし、この地が歩んできた歴史となると、ほとんど知られていない。たとえば、天母という地名の由来も、事実とは異なるものが定着している。それは以下のようなものである。戦後間もない頃、この地に住み始めた米軍関係者が現地の人々に声をかけた際、英語を理解できない人々が「聽無（ていあぼー）」と答えた。これは台湾語（ローロー語）で「聞いて意味がわからない」という意味だが、この発音が「天母」に近いので、天母が地名となったというもの。現在、台湾の人々に天母の地名の由来を問うと、たいていこのエピソードが返ってくるはずだ。

また、実際に天母地区に赴き、当地の人々に天

母の歴史を尋ねてみてもしっかりとした答えが返ってくる確率は低い。これは1970年代以降に移入者が激増し、現在の天母が形成されたことにもよる。それに加え、商業エリアとしての発達はあっても、小規模店舗が多く、移り変わりが激しいという現実もある。いずれにしても、天母には土地の歴史を知る「証人」が驚くほど少ないのである。

もともとは「三角埔」を名乗っていた

「天母」という地名はもともとあったものではない。清国統治時代、この土地は台湾語で三角埔²と呼ばれていた。これは三角形をした原野という意味であり、ほとんど無人地帯であったという。農地として切りひらかれることもなく、全くの未開発地であったことが推測される。

この地が文献に登場するのは、平埔族（台湾西



台北を代表する高級住宅街となっている天母。その中心とされるのは「天母廣場」と呼ばれる中山北路と天母東・西路の交差点付近。巨大なロータリーが公共スペースとして整備されている。

部に暮らした平地原住民の総称)の一部族であるケタガン族の集落としてである。

17世紀頃の台湾の様子を描いた『裨海紀遊(はいかいきゆう)』³という書物がある。ここに「麻少翁」という集落の存在が記されている。これが現在の天母の地にほぼ一致する。もともとは淡水河の河畔に暮らしていたケタガン族だったが、この時代は台北盆地を中心とした広い地域に居住するようになっていた。麻少翁社(社は原住民族の集落を意味する)も、彼らの集落であった。

『裨海紀遊』の著者である郁永河は清国の官吏であり、1697年2月に台湾南部の鹿耳門に上陸したと伝えられている。その後、台南付近で随行する人員を募集し、北を目指して進んだ。本文にはその途中で目にした平埔族の人々の様子や台湾西部の地形、文化が克明に描かれている。一行は上陸から約2ヶ月あまりで台北盆地にたどり着いたと言われている。

郁永河の目的は台湾北部の硫黄の調査と採掘であった。1696年、福建省福州で大規模な火薬庫の火災があり、硫黄の需要が高まったが、福建地方には硫黄を採掘できる場所がなかった。そのため、郁永河が台湾に派遣され、調査にあたった。そして、約半年にわたって北投一帯で硫黄の採掘を行ない、10月20日に福州に戻っている。

なお、『裨海紀遊』には台北一帯に大きな湖があったと記されている。その名は「康熙台北湖」。1694年4月24日に起きた康熙大地震によってできた湖で、この地震は余震が1ヶ月も続いたという。その際、広範囲にわたって液状化現象が起こったというが、この康熙台北湖の存在自体は真偽を問われており、詳細は明らかではない。

先に挙げた麻少翁という集落も本来はより低海拔の場所にあったが、地震によって退転を余儀なくされ、現在の天母地域に移住したと伝えられている。しかし、現在、痕跡らしきものは一切残っていない。

長らく歴史の空白期を迎える

その後は空白の時代が訪れる。清国が台湾を統治していた時、北投は硫黄の存在によってある程度は知られていたが、三角埔一帯は居住者も少なく、行政に顧みられることはなかった。日本の統治下に入った後もこの一帯についての詳細な記載は見られない。

ただし、付近を流れる磺溪(こうけい)の存在は知られていた。磺溪とは固有名詞であると同時に、「硫黄が流れ出た溪流」という意味がある。現在も天母の住宅街の西側を白濁した河川が流れているが、これが磺溪であり、上流部で湧出した温泉水と地下水が河水となっている。もともとこの一帯に温泉が存在することは知られていたが、人里離れた場所にあり、しかも、毒蛇がたくさん棲息していたこともあって、開発の手は入らなかった。長らく知られざる出湯となっていたのである。

磺溪の上流には硫黄採掘場があった。「龍鳳谷」と呼ばれている谷間がその跡地であるとされている。現在は陽明山国家公園(国立公園)の管理するエリア内にあり、案内板などの整備がなされている。遺構らしきものは残っていないが、草木が生えず、露出した岩肌が非常に荒涼とした印象を与えている。随所に立ちこめる噴煙の存在も印象的だ。



龍鳳谷の様子。谷間そのものが温泉の湧出地であり、硫黄の採掘場であった。北投と草山(現陽明山)の中程に位置する。

台北に最も近い出湯、紗帽谷温泉

やや余談になるが、市民に親しまれている小さな温泉街についても紹介しておきたい。それは紗帽谷温泉と呼ばれており、日本統治時代は天母温泉と呼ばれていた。しかし、長らく浴場施設などはなく、知られることはなかった。現在も10軒あまりの浴場が集まるばかりである。

興味深いのは、どの浴場もレストランを併設していることである。つまり、食事と温泉浴をセットで楽しむのだ。味わえるの台湾料理で、中でも地鶏の美味しさで知られている。料理を味わった



紗帽谷温泉の特色はレストランと浴場施設が組み合わさっていること。「温泉餐廳」と名付けられたこのスタイルは台湾でも多くはない。



紗帽谷温泉は湯量が豊富。台北市内からは路線バスでアクセスできるといふ気軽さもあって高い人気を誇る。

後、温泉浴を楽しむ人が多いが、もちろん、先に入浴してから食事をして構わない。

この温泉は北投や陽明山といった温泉に近いが、泉質はどちらにも属さない独自のもの。無色無臭の酸性硫黄泉で、多種多様な鉱物を含んでいるために飲用には適さない。湯は常に微量の白色沈殿物を含んでいる。貧血病や皮膚病、その他婦人病や関節炎などに治癒効果があるという。

天母教—新興宗教によって拓かれた町

三角埔が本格的な開発を受けるのは昭和時代に入ってからである。そこには天母教（てんぼきょう）と呼ばれた宗教団体が大きく関わっている。これは日本統治下の台湾に生まれた神道系の新興宗教で、開祖は中治稔郎（なかじとしろう）という人物。教団は1925（大正14）年に設立されている。

天母教の教義は非常に独特なものである。日本古来の神道と中国大陸南方の媽祖信仰⁴を結びつけたもので、端的に言えば、天照大神と媽祖を同一視するという斬新なものだった。教団名となった「天母」も天照大神、そして天上聖母とも呼ばれる媽祖を意味している。両者が女神であったことは偶然ではなく、教義には「母の愛情は人類で最も強い」とされ、母性愛は仁愛を体現できるがゆえに、神は女性の姿をとって現れたという表記がある。

中治は明治11年1月13日、兵庫県生まれ。明治28年8月5日に兵庫県朝来（あさご）郡和田山（現朝来市）の竹田尋常高等小学校尋常科准訓導の職に就いている。その後、1902（明治35）年頃に台湾へ渡り、同39年に台湾総督府民政部通信局に奉職。1921（大正10）年には台南郵便局庶務課長となっている（中治赳夫著『加都郷～埋蔵金は今何処に～』より）。

その後、台北に転じ、1925（大正14）年に依願退職。その後、教派神道の一派で富士講を起源と

した扶桑教に傾倒する。そして、辜顕榮邸に滞在していた宗教思想家・中西牛郎（うしお）と出会い、扶桑教の教義から新しい教義を生み出すことになる。これが天母教となった。

天母教の創設と媽祖分霊

台湾総督府から認可を得た中治稔郎は教団の開祖となり、天母教教祖・権大教正を名乗る。この時、中治は媽祖信仰の聖地である福建の湄洲まで自ら赴き、媽祖の神体を持ち帰っている。この辺りの背景や状況は謎が多く、経路など、詳細を掴むことは難しいが、個人の立場で中国（中華民国）に赴くことは容易ではなく、その意気込みを感じ取ることができる。

時代背景を考えると、天母教という新興宗教を打ち立てた背景には、台湾の土着信仰を取り込み、信仰の側面から総督府の統治を支えたという意味あいは疑いない。実際に台湾総督府は渡台した宗教団体を手厚く保護しているし、台湾人の教化を推進する政策を積極的に採用している。中治も熱心な媽祖信仰を前にして、これを国家神道と結びつけようとしたと推測するのは不自然ではない。

しかし、海外渡航が容易な時代ではなく、媽祖の分霊についても相当な手はずが必要だったこと、郵便局の課長職を辞してまで教団設立に賭けていることなどを考えると、中治自身が媽祖信仰に魅せられていたのではないかという推測も十分に成り立つ。

さらに、中治家は代々、篤志家として知られ、祖父太兵衛嘉貞や父精逸は地域住民からの信望が非常に厚かったという。そういった血を受け継いだ中治が台湾人をいかにして導くかを考え抜き、結果として、「日本人と台湾人が共生するためには信仰が不可欠」と考えたのも十分に考えられる。

温泉施設を擁した教団

天母教については史料・文献の類が極めて少な

く、その全容に近づくことは容易ではない。私自身、長らく天母教についての資料や記録に出会うことができないでいたが、北投を中心に郷土文化を探究している楊燁氏（北投虹燁工作室主宰）から貴重な資料を見せてもらった。それは1936（昭和11）年4月に発行された『臺灣自動車界』という雑誌の記事で、天母温泉の紹介がなされていた。以下、その記事から天母教、そして、天母温泉について、紹介してみたい。

もともと天母教の教団本部は台北市永楽町にあった。中治稔郎はここで台湾民衆の教化を始めたが、翌年には台北市元園町252番地に移転している。ここには神殿、拝殿、付属集会所、教主住宅が設けられていた。その後、1931（昭和6）年に台北郊外の三角埔に湧く温泉の権利を獲得。ここを本拠地とする。その用地は約9万坪におよんでいたという。

教団移転と新社殿造営にあたって、中治は神明を受けたとされている。その夢の中にお告げとして出湯の存在が語られ、それをもとにこの地が選ばれたとも伝えられる。場所は礦溪の東岸一帯が選ばれ、各種施設が設けられることになる。

温泉は各種婦人病、神経性傷害、脚気、打撲、痔、皮膚病などに卓効が見られたという。しかし、泉源はこの場所ではなく、4キロほど離れた場所にあった。高低差があったため、これを活用して導管を敷設したという。この工事は3年近い歳月を要し、濃度の高い硫黄を含むために竹筒が用いられたという。これにエタニークと呼ばれる手法を用いて内密度を高め、水の浸透を避ける。さらに防酸剤と保温塗料を用いて内部を凝固するという方法が採用された。工事費は2万100円という巨費におよんだ。

引き湯工事が始まったのは1933（昭和8）年のことだった。教団施設の造営はその翌々年に大部分が終了している。この時には浴場、神苑、仮神殿が完成しており、教団を正式に移転させている。

敷地内に温泉設備を擁する宗教団体というのは珍しく、話題となったようである。1937(昭和12)年1月には教団直営の「一の湯寮」と呼ばれる旅館・浴場の経営も始まり、中治の夫人カナヲが経営者となり、末娘の詠子がこれを受け継いだ。

一の湯寮は700坪の敷地を誇っていた。煉瓦作りと木造平屋の建物が4棟あり、建坪は121坪におよんでいたという。そして、50畳の大広間と別室があった。浴場は25坪で男女別の浴室があったという。

浴室からは遠くに台北の家並みが眺められ、夜景も楽しめたという。これは大広間からも同じ風景が眺められるよう、配慮されていたという。また、西には観音山、北には大屯山や七星山、さらに、南には台北の家並みの奥に中央山脈までもが見られたという。

バス会社の経営、そして、壮大な都市計画

天母教は温泉浴場の経営のほか、バス会社の経営も行っていた。この会社は天母バスを名乗り、士林から天母温泉までの路線を運行していた。その時刻表を見ると、平日は1日12便。本社や車庫が教団内にあったため、始発は士林発ではなく、天母温泉発だった。日中はほぼ1時間おきに便があり、所要時間は20分となっている。

前述の『臺灣自動車界』によれば、大型バスが輸送を担い、女性車掌も乗務していたという。途中では沿線名所を案内したりもしていたというのが興味深い。天母教としては温泉のみならず、将来的には付近一帯の観光開発も手がけていくことを考えていたようで、ハイキングコースなどの整備も進めていたようである。

また、天母教は教団を中心とした高級住宅地の開発も計画している。これは教団付近に約3万坪の住宅街を整備し、ここを一大田園都市とするものだった。民間人が自ら広大な敷地を確保し、理想的な住宅街を作ろうというのは非常に斬新な発

楊燁氏(北投虹燁工作室)提供の貴重な資料。安い運賃と本数の多さが特筆される天母温泉バスの時刻表

想で、植民地統治下の台湾においては唯一と言ってもいいほどのものである。

これだけの規模のものだったので、教団本部周辺の開発は重田栄治という人物との共同事業として進められた。重田は台北市の中心部栄町(現衡陽路周辺)に菊元百貨店を創設した人物で、台北を代表する名士の一人として知られていた。

菊元百貨店については回を改めるが、台北の目抜き通りである栄町通りに面し、7階建てで、台北随一の高さを誇っていた。中治と重田の出会いについての詳細を知ることはできないが、この時代において、新興住宅街の開発、都市計画という壮大な理想を抱いていたことは特筆すべきことと言えるだろう。戦時体制という逆境の中、それでも理想郷を作ろうとした中治と重田はどのような未来像を描いていたのだろうか。結局、敗戦によって日本人は台湾を去ることになり、二人の夢は頓挫したが、奇しくもその理想は戦後、思いも寄らない形で結実することになる。



天母教は終戦と同時に中治家の帰国によって消滅した。しかし、天母は後に発展を遂げ、中治が描いていた高級住宅街の夢は結実した。現在の天母の様子。



地名となって残った「天母」。教団は敗戦によって消滅したが、台湾の地に深く刻まれることとなった。

「天母」がこの地の名称となる

ここで天母という地名についても触れておきたい。もともと、日本統治時代の地名は三角埔であり、天母教が組織を構えた後も、地名としては三角埔であった。

終戦を迎え、1949年に国民党政府が台湾へやってくると、外省籍官吏たちの移入が始まる。市内に比べれば戦災も少なく、高級住宅街として開発が計画されていたこのエリアはすでに住環境の良さが際立っていたようである。当時、外省人の多くは中国大陸奪還を信じており、台湾を永住の地とは思っていなかった。つまり、あくまでも一時的な居住地だったが、高級官僚がこの地を選んだことは発展の契機となった。

1951年、中華民国政府は形式的な地方選挙を実施した。この地域からも何名かの候補者が出たが、「第一回縣議員選挙」では議員を送り込むことができなかった。その後、選挙区内の三玉里、芝山里、蘭雅里は団結して選挙に臨むことを話し合った。「里」とは日本で言う町内会に似た組織である。候補者は各「里」から交互に立てられ、任期は一回きりとした。この策は功を奏し、1958年に実施された第四回縣議員選挙で劉禮榕氏が台北県議会の議員として選出されている。

この際、三玉、芝山、蘭雅が結集した際の総称

に選ばれたのが「天母」だった。つまり、日本統治時代に天母教が開発を手がけようとしていた地域の名が天母になったのである。当然、日本統治時代に三角埔と呼ばれていたエリアもそこには含まれている。天母教は敗戦によって消滅したが、地名となって台湾の地に残ることになったのである。なお、その後の地方議員選挙でもこの天母から順当に議員が輩出され、天母という地名も広く知られるようになっていった。

厳密には、日本統治時代の天母エリアは教団のあった一帯だけを示し、現在ほど広範囲ではなかった。具体的には現在の中山北路7段一帯のみを示していた。しかし、上記のような経緯を経て、現在のような広範囲が天母と呼ばれるようになった。

終戦後の天母

1945（昭和20）年に戦争が終結し、日本人は引き揚げることになった。中治稔郎もその例に漏れず、家族とともに台湾を離れた。これによって天母教は消滅の憂き目に遭った。理想を途中で投げ出さなければならなかった中治の胸中がいかなるものであったか、それを知ることはできない。そして、教団消滅の顛末も謎に包まれたままである。

戦後を迎え、台湾の新たな統治者となった中華民国政府は日本に由来するものを抹消しようと試

みた。天母教が所有していた資産もすべて国民党に接収された。社殿をはじめとする建物のすべて、そして、土地の所有権についても、移管を強要されている。その後、天母教が開いていた旅館施設については、士林紙業会社が管理者となり、宿舎となった。そして、温泉浴室は公共浴場となっていた。

しかし、中治が夢見ていた高級住宅街を作りあげる計画については、奇しくも実現することになった。戦後、軍事顧問団として台湾へやってきた米軍関係者が生活環境の良さに惹かれ、この地に住むようになったからである。彼らは郷里の暮らしぶりを台湾に持ち込もうとし、英語混じりの看板が目立つようになった。そして、1949年には美國学校（アメリカンスクール）も開校し、外国人居住者が増える契機となった。1983年には日本人学校もこの地に移転してきている。



米軍関係者が台湾を去った後も、天母は外国人居住区となっていた。日本人学校も1983年10月にこの地へ移転してきた。



天母教の教団本部があったのは現在の中山北路7段191巷一带だったと伝えられるが、痕跡らしきものは残っていない。

高級住宅街としての天母はこうして形成された。つまり、その源をたどっていくと、行きつくところには天母教の開祖・中治稔郎と、そこに携わった菊元百貨店のオーナー・重田栄治の夢がある。二人の理想は頓挫を強いられたが、戦後、当人たちが全く知り得ない状況の中で、天母は発展を続け、誰もがうらやむ高級住宅街となって現在に至るのである。運命の巡り合わせというにはあまりに奇妙な結果がここに生まれた。

現在も祀られている天母教のご神体

天母教は天照大神と媽祖を同一視し、これを信仰の対象としていた。国家神道系の教団の中で外地・台湾の土着信仰を取り込むということは極めて異例である。それだけでも注目に値するが、開祖・中治稔郎は形式的なものではなく、福建の湄洲まで赴いて媽祖のご神体を台湾に運んできている。その神体は今、どうなっているのだろうか。

現在、天母エリアの中心とされる中山北路と天母東・西路の交差点近くに、三玉宮という廟がある。ここに天母教教団が所有していた媽祖像が保管されている。三玉宮はもともと土地公を祀る祠でその歴史は1750年頃まで遡る。その後、1947年に現在の天母西路辺りに移転した。そして、道路の拡張工事を受け、現在の場所に移ったという。1966年のことだった。

三玉宮は道教寺院によく見られるように、複数のご神体を信仰の対象としている。媽祖像は本殿の正面左手に祀られているが、ここには合計7尊の媽祖がいる。中央に安置されたものが最大で、右手に見える顔の黒い媽祖像が最も古い。この中に天母教の教団で護られてきた媽祖像がある。私はその話を数年前に聞かされていたが、決定的な証言を掴むことができないでいた。

しかし、国民党政府によって日本にゆかりのあるものが排斥を受けた時代であっても、台湾の庶民信仰に深く根ざした媽祖に手を付けることはで

きないし、撤去する必然性もない。また、2013年2月に中治稔郎の遺族である伊井達・昌子夫妻を訪ねた際にも、天母教の媽祖像が現存することを教えられていた。

そして、本稿執筆の再調査の際、その媽祖像を突き止めることができた。廟と深く関わってきたという呉義順氏の計らいで、この地に生まれ育ったという彰化在住の古老に話を聞くことができ、正面の媽祖像の右手にあるものが福建湄洲から分霊してきた媽祖像だということがわかった。

天母教が管理していた媽祖像は状態も良く、決



三玉宮は庶民信仰の場として多くの信徒が訪れている。媽祖は正面左手に祀られている。

して古い感じのものではない。中治が分霊した媽祖像の台座には「湄洲天上聖母」を刻まれている。呉義順氏と廟管理人の好意で間近で媽祖像を見ることを許されたが、今も大切に扱われていることが強く伝わってきた。

天母教は消滅の運命をたどり、開祖もこの地を去ったが、教団に置かれていた媽祖像はあくまでも生き続けていることがわかる。そういったことをふまえると、改めて中治稔郎自身がどのような思いで媽祖像を持ち込み、そして、自らの宗教の中に取り込んでいこうとしたのか、その点が気に



天母教に安置されていた媽祖像は今も信仰の対象となっている。台座には媽祖信仰の総本山であり、媽祖の出身地である湄洲の名が刻まれている。



天母教で祀られていた媽祖の神体は教祖自らが福建まで赴いて分霊したものだ。教団の神殿は天母社、もしくは天母宮と呼ばれていた。



中治家について記された書籍。天母教開祖・中治稔郎について詳しく記された唯一の文献とも言っている存在である（伊井達・昌子夫妻提供）。

なってならない。

領台初期に台湾へ渡り、後に天母教を開いた中治稔郎。宗教団体としての天母教の歴史は短かつ

たが、中治が残したものは今もなお、ここ天母という土地とともにあることは疑いない。今後の調査が期待される。

片倉佳史 (かたくら よしふみ)

1969年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた旅行ガイドブックは35冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けており、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動も行なっている。著書に『台湾に生きている日本』(祥伝社)、『観光コースでない台湾』(高文研)、『台湾に残る日本鉄道遺産』(交通新聞社新書)などのほか、李登輝元総統の著作『日台の「心と心の絆」～素晴らしき日本人へ』(宝島社)も手がけた。そのほか、台湾でも『台湾風景印-台湾・駅スタンプと風景印の旅』『台湾土地・日本表情』(玉山社)などの著作がある。最新刊は共著『日本人、台湾を拓く。』(まどか出版)。

ウェブサイト台湾特捜百貨店 <http://katakura.net/>

¹ 北京語での発音は「ティエンムー」。

² 三角埔は台湾語では「さーがっぼ」と発音するが、日本統治時代は日本語読みで「さんかっほ」、もしくは「さんがっほ」と読んでいた。

³ 『稗海記遊』とも記される。

⁴ 媽祖は中国大陸南部で広範囲にわたって信仰の対象となっている宋代の実在人物。航海の女神とされ、台湾においても篤い信仰を受けている。